

第7回常呂川減災対策協議会 議事概要

日時：令和3年7月5日（月）14：00～16：00

開催方法：WEBによる開催（Webex）

出席者：北見市長、訓子府町長、置戸町長、網走地方気象台長、陸上自衛隊第6普通科連隊第2科情報幹部、北海道警察北見方面本部警備課長補佐、北見警察署警備課長、北見地区消防組合消防本部消防長、北海道オホーツク総合振興局副局長、網走開発建設部長

《議事内容》

（1）講演「なぜ常呂川流域タイムラインが必要なのか」

東京大学大学院情報学環総合防災情報研究センター客員教授 松尾一郎

（2）規約の改正

（3）幹事会報告

（4）取組状況のフォローアップ

（5）情報共有

（6）意見交換

（7）今後のスケジュール

【事務局からの説明を踏まえた、各機関からの意見】

（北見市）

- ・参加の皆様には、本市の防災減災行政に対するご支援およびご協力に厚く御礼を申し上げます。松尾先生には、貴重なご講演およびご提言をいただき、大変感謝を申し上げます。
- ・災害対策基本法の改正については、避難指示の一本化等避難情報の変更について、ホームページ、防災メール、広報などを通じ市民に周知を図っている。
- ・周知については、避難情報の変更、ハザードマップにより避難方法の事前確認、友人・知人宅への避難や在宅避難などの分散避難についても、改めて市民の皆さんが正しく理解し適切に行動できるよう、分かりやすく丁寧に伝えていくことが重要である。
- ・市内約260の要配慮者利用施設に、改正水防法に基づく避難確保計画を早急に作成するようお願いしている。早期避難を目指す観点からより迅速かつ確実な対応が求められ、これまでの手順の確認や水位周知河川等のタイムライン修正が必要であると考えている。一方、中小河川などの水位周知河川以外の避難情報については、関係機関の気象情報やパトロール等の防災情報が重要な判断基準となることから、引き続き、きめの細かい的確な情報提供やご助言をお願いしたい。大雨シーズンを迎えるにあたり、コロナ禍により災害対応にも様々な制約が続く中、本減災対策協議会を通じて、今後とも皆様とのさらなる連携と協力をお願いしたい。

（訓子府町）

- ・本会議は7回となるが、警察や気象台を含めた各関係機関が一堂に会する意義を深く感じており、対面形式による開催の必要性を強く感じた。また、慣れないWEB会議であったが様々な話

を聞いて良かった。

- ・東大松尾先生のタイムラインの話がとても参考になった。北見市の常呂自治区と開発建設部は、常呂川下流域での氾濫を想定したタイムラインをいち早く共同で作成しており、一連の流れとして各市町村で常呂川流域でのタイムライン具体化は非常に大事だと思う。常呂自治区では大変な手間と時間をかけて水害タイムラインを作成したのを知っているので、全く同じようには行かないが河川事務所、開発建設部から協力いただき、具体的な取り組みを推進していただきたい。
- ・防災備品等の充実を図っており、段ボールベット、災害備蓄マット、災害用トイレセット等が挙げられる。最近では民間から多数の寄付をいただいている。
- ・自衛隊美幌駐屯地の方が参加されるなど、関係機関が機能を発揮できるような状況をそれぞれの町で作り上げてきたことも大きな成果と考えている。
- ・訓子府町は、1,000年に1度を想定すると、現状の避難施設は機能しないことが分かっており、想定を踏まえ、新しい消防庁舎を旧ふるさと銀河線の線路跡地に建設する計画となっている。今後の災害への対策検討が重要であると感じている。
- ・河川事務所の協力で、鹿ノ子ダム放流時における水の到達時間算出およびタイムラインへの明記、排水訓練の実施等をしており、各々が力を発揮して総合的に連携することが非常に大事であると感じている。
- ・自治的な防災組織結成を目指しているが、コロナの関係で28自治区や町内会のうち6組織の結成にとどまっている。住民の防災組織を町全体に拡大することが非常に大事である。

(置戸町)

- ・昨年初めて出席した際、災害は忘れる前にやってくると発言したが、まさにその通りに昨年は熊本県で災害が発生し、今年は熱海で災害が発生した。雨量が増大し短期的に頻発することを踏まえ、いつどこで発生するか分からない災害に対して備えていくべきと再認識した。
- ・松尾先生のお話をいただき、タイムライン等、実践・行動できる計画を組んでいかなければいけないが、いまだにできていないと感じるところがあり、ぜひ勉強しながら流域全体のタイムラインの構築に積極的に関わっていきたくないと認識している。
- ・近年のコロナクラスターの発生状況等を踏まえ、従来の段ボールベットに加えパーテーションや除染除菌用物品を購入している。また、北海道防災教育アドバイザー根本先生のご支援・ご指導があり、自動ラップ式トイレも備品購入をしている。
- ・避難所となる公共施設の非常電源装置の整備を随時実施している。
- ・災害に対し一人でも亡くさないよう、自助・共助・公助の考え方について、住民と共通認識、意識を持ちながら進めていく必要がある。
- ・自主防災組織の育成、結成、実戦的な訓練の実施をしていく必要があるが、昨年および一昨年はコロナの影響で大規模な訓練はできずにいる。その中でも、備品の展示会、各住宅で所有の防災備品の診断、説明会を実施している。
- ・今年3月に作成した防災ガイドファイルは、常呂川および訓子府川の浸水区域のマップが新たになったことを踏まえており、一家庭に一冊配布している。ファイル式とすることで、更新があった際に加除が可能となっている。
- ・置戸町強靱化計画を令和3年3月に策定しており、個別計画と合わせて今後の町全体での防災

に関する様々な整備方針を固めていきたい。

- ・置戸町は、昭和50年に200戸程、床上浸水・床下浸水が発生する災害を経験しているが、昭和58年に鹿ノ子ダムが完成して以来大きな水害が発生していない。しかし、現在は大雨が降る時代であり、いろいろなことに備え防災に努めていきたい。

(網走地方气象台)

- ・全国的に雨の降り方が極端なケースが目立っており、これまでの観測の記録を上回るような雨も見られるようになってきた。松尾先生からお話があったように、昨年は熊本県球磨川流域で史上最大の雨量を超える大雨となり、流域に大きな被害が発生したことは記憶に新しい。
- ・一昨年は台風19号の影響により長野県の千曲川で堤防が決壊しており、平成30年は普段雨が少ないとされていた瀬戸内側の岡山県高梁川の支流が氾濫し大きな被害が発生している。このような災害はいつどこで発生してもおかしくない状況にあり、オホーツク地域でも他人ごとではないと考えている。網走地方气象台では、各種情報の発表、雨量の見通し、雨のタイミング、雨量の観測状況など、気象の観点から協力をしていきたいと強く考えている。
- ・北海道では、本州が梅雨明けする7月後半から本格的な大雨の季節に入り、台風の影響を受けやすくなる9月、年によっては10月前半まで大雨の危険性が高い時期となるため、適時かつ適切な情報提供ができるよう監視を強化していく。

(陸上自衛隊第6普通科連隊)

- ・今年度、災害情報収集訓練をはじめ、継続的な災害用ドローン操縦訓練を実施している。今後、救命ボート等を使用した人命救助訓練も実施予定である。引き続き情報提供をお願いしたい。

(北海道警察北見方面本部)(北見警察署)

- ・水難救助をはじめ、各種災害警備訓練を実施している。また、各自治体が主催する防災避難訓練に参加している。先日は美幌町主催の土砂から要救助者を救助する訓練に参加している。
- ・網走地方气象台の方を講師として、職員の防災意識醸成を目的とした教養セミナーを年2回程度開催している。また、各警察署で、ミニ広報誌や各種会合等での講話を通じて、地域住民の方に向け防災に関する意識啓発を行っている。

(北見地区消防組合消防本部)

- ・引き続き消防職員・団員の水防技術習得に努め、各機関と連携して災害対応に努めていく。消防の災害対応に必要なマンパワーの担い手である消防団員が減少傾向にある中、昨年度の消防組合全体では微増したものの、人口減少、高齢化、雇用形態の変化など様々な観点で団員募集には苦慮している。加入促進として、地域住民の皆様に幅広くPRし団員を募集しているところだが、団員確保に向け各機関にも協力をお願いしている。
- ・タイムラインでは、各々が実施すべき行動が明記されており、消防として装備や警防員の増強など早期の対応に心がけたい。特に災害現場では、各機関との情報共有が最も重要であると認識しており、各機関の連携を引き続きお願いしたい。

(オホーツク総合振興局)

- ・ 水害リスクの高い場所への危機管理型水位計および範囲型河川監視カメラの設置を平成30年度から進めている。令和2年度末までに、網走川ほか減災対策協議会流域において危機管理型水位13基および簡易型河川監視カメラ7基、常呂川減災対策協議会流域では危機管理型水位21基および簡易型河川監視カメラ16基を設置し、水位情報および河川水位情報等を提供している。これにより、洪水発生時などリアルタイムでの河川状況の把握が可能となり、地域住民の円滑な避難行動を促す一助となることが考えられる。

以 上